

【日本側コーディネーター及び拠点機関名】

日本側拠点機関名	京都大学・総合博物館
日本側コーディネーター所属・氏名	京都大学・総合博物館 准教授 本川雅治
研究交流課題名	アジア脊椎動物種多様性の研究者・標本・情報一体型ネットワーク 拠点
相手国及び拠点機関名	中国・山東大学 韓国・ソウル国立大学 ベトナム・ベトナム科学技術院生態学生物資源研究所 タイ・チュラロンコン大学 マレーシア・マラヤ大学 インドネシア・インドネシア科学院生物研究センター

研究交流計画の目標・概要

【研究交流目標】 交流期間（最長3年間）を通じての目標を記入してください。実施計画の基本となります。

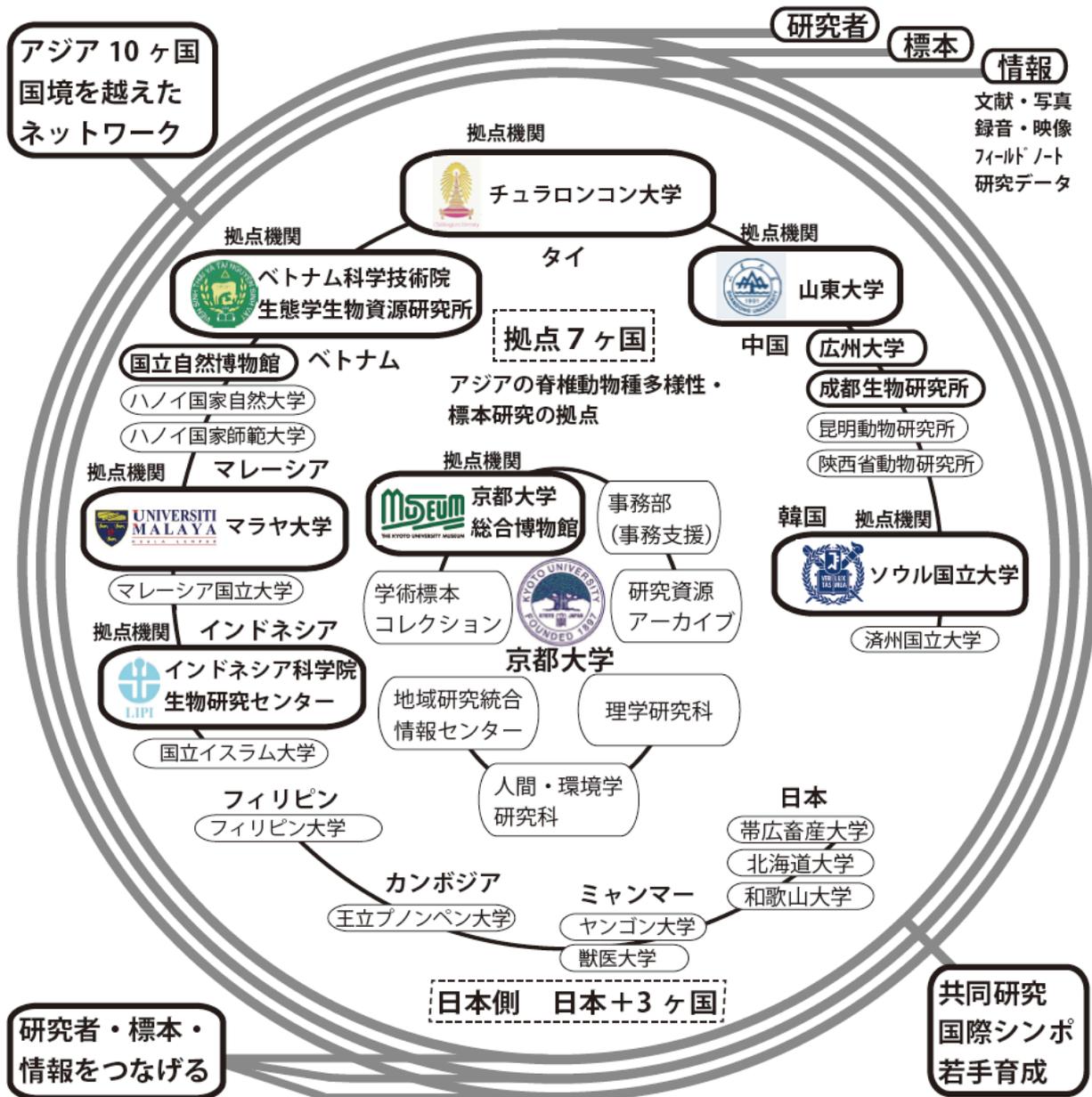
アジアは世界的にも生物多様性が高い一方で、文化や言語の多様性とも関連して、生物多様性に関する研究者・標本・情報の国境を越えた多国間共同体制や共有が十分に進んでこなかった。本研究課題では、脊椎動物種多様性に着目し、研究者・標本・情報の一体型ネットワーク拠点の形成を目指す。標本や情報（文献・写真・録音・映像・フィールドノート・研究データなど）は研究の基盤となるだけでなく、研究の証としても将来にわたって重要である。したがって、脊椎動物種多様性の研究基盤とは、研究者、標本、情報が一体となつてつながったものとなることが重要である。日本、韓国、中国、タイ、ベトナム、マレーシア、インドネシアの拠点機関となる7ヶ国と日本側メンバーとして参加するミャンマー、カンボジア、フィリピンの3ヶ国の東・東南アジアをほぼ網羅した計10ヶ国からのメンバーにより、交流期間を通じて、1. アジア多国間共同研究の実施と共通した種分類体系の構築、2. 原産国を基本にした標本収集と21世紀型標本ネットワークモデルの確立、3. アジア多言語で蓄積・生成される生物多様性情報の活用、4. 非言語による生物多様性データの収集・活用手法の開発、5. 国際的に活躍する生物多様性若手人材の育成、6. アジアの生物多様性と文化多様性の調和のとれた保全の模索、を本研究課題の目標として、アジア脊椎動物種多様性の研究者・標本・情報一体型ネットワーク拠点を形成する。

【研究交流計画の概要】 ①共同研究、②セミナー、③研究者交流を軸とし、研究交流計画の概要を記入してください。

アジアの陸上脊椎動物の種多様性研究においては、現在でも新種が多く発見される状況にあることに加えて、国境を越えて多くの国にまたがって広域に分布する種の分類学的位置づけの見直しが必要である。特に後者では、アジア各国での共通した種分類体系に基づき、標本や情報を共有しながら、新たな多国間枠組みでのフィールドワークが必要である。本研究課題では、①共同研究と②セミナーを組み合わせた研究交流を進める。招へいや派遣による研究者交流はあくまでも現場での共同研究に伴って計画するために、③研究者交流ではなく①共同研究として実施する。共同研究として、本研究課題および他の研究資金を使いながら、広域分布種に特に着目しながら、関係する各国でのフィールドワークと標本調査などを、二国間ではなく、できるだけ多国間の枠組みで進め、論文成果につなげる。あわせて、そこから生成される、あるいはすでに蓄積されてきた標本、言語化された情報、非言語データの将来にわたる収集・保管・活用についての検討を進める。研究交流全体の情報を共有し、さらに発展させていくために、年1回の国際シンポジウムを開催し、各国メンバーが議論を行う。このほかに年2回ほどのテーマを絞ったセミナーを内容に関わる研究者が参加して行う。本研究課題では、このように①共同研究と②セミナーを研究交流の柱とし、さらに若手研究者の育成については、これら2つに組み込んでいく形で進めていく。参加国は多いが、韓国と中国は相手国での予算も十分で、経費負担が予定されている。本研究課題予算での支出は主として、日本および東南アジア各国からの参加者に対するものである。

[実施体制概念図] 本事業による経費支給期間（最長3年間）終了時までには構築する国際研究協力ネットワークの概念図を描いてください。

アジア脊椎動物種多様性の研究者・標本・情報一体型ネットワーク拠点



アジア多国間共同研究の実施と共通した種分類体系の構築
 原産国を基本にした標本収蔵と 21 世紀型標本ネットワークモデル
 アジア多言語で蓄積・生成される生物多様性情報の活用
 非言語による生物多様性データの収集・活用手法の開発
 国際的に活躍する生物多様性若手人材の育成
 アジアの生物多様性と文化多様性の調和のとれた保全
 → 日本主導のアジア型脊椎動物種多様性ネットワーク拠点形成